

激動の世界と日本 若者よ、元気を出せ

国連事務次長、赤阪清隆

「激動の世界と日本」という主題の下、日本を取り巻く3つの国際的な課題についてお話ししたいと思います。

ひとつは、今、世界が地響きを立てて大きく揺れ動いている、それに我々はどう対応するかということです。

2011年は、日本では東日本大震災の年として記憶されるでしょう。地震、津波のみならず、原発事故も世界に大きな衝撃を与えました。原発への信頼が揺らいだ年として覚えられるかも知れません。

また、2011年は、この大震災に加えて、アラブ世界で起きた革命の年としても、世界の歴史に長く記録されるでしょう。

こんなジョークを聞いたことがあります。昔昔のこと、ある国の刑務所にいた囚人の話です。彼は死刑を申し渡されていました。いよいよ今日は処刑というときに、その囚人が役人に、「ちょっと待ってください。私は魔術師なのですが、1年猶予を下されば、そこにいる馬が空を飛ぶようにしてみせることができます」と言ったのですね。それを聞いたその国の王様は、ぜひ空飛ぶ馬を見たいと思って、処刑を1年延ばしたのです。それを知った囚人の仲間が、「お前本当に馬を空に飛ばせられるのか」と聞いたところ、その囚人は、「ばか、そんなことが出来るわけがないじゃないか。1年の猶予をもらったんだ。これから1年以内には世の中何が起きるかわからん。これで、助かるかも知れん」。

その、1年以内に世の中何が起きるかわからないというようなことが、現実にはアラブの世界で起きたのです。私は、去年の12月初めに、エジプトのアレキサンドリアとカイロを訪問しました。いろんな人との間で、若者が大学を出てもなかなか仕事を見つけられないという話は出ました。しかし、恥ずかしながら、それからひと月あまりの間に、革命が起きて、30年間も続いたムバラク政権が倒れるとは夢にも思いませんでした。

エジプトの前に、チュニジアで革命が起きて、これも23年続いてきたベンアリ長期政権が倒れました。このチュニジアの革命というのは、去年の12月17日、モハメッド・ブーアジジという26歳の若者が焼身自殺を図ったことから始まっている

のですね。彼は道路で野菜などを売って歩いて貧しい家族を支えていました。お金の無い貧しい人たちには残った野菜をただであげるような優しい若者だったようです。しかし、彼はいつも警官や役所などから商売の許可証が無いとかで嫌がらせをされていたようです。その日の朝、彼は、町の役所の女性職員から公の場で、つばをかけられたり、商売道具の秤を没収されたりして、辱めを受けたようです。そして彼は、町長に訴え出るのですが聞いてもらえず、ガソリンをわが身にかけて焼身自殺を図るに至るのです。そして18日間の塗炭の苦しみの末、今年1月4日になくなりました。

ブーアジジの絶望的な行動は、彼の同僚やチュニジアの若者の同情と怒りを呼びました。長年にわたる圧制が続いていたのと、若者の失業率が30パーセント以上にも達していたからです。彼らは、国の富を独占し、贅沢な生活に明け暮れるベンアリ大統領一族への怒りを沸騰させていたのです。自由と生活の向上を求める大衆の反政府運動が、野火のごとく瞬く間に全国に広がり、1月14日にはベンアリ大統領が家族を連れてサウジアラビアに亡命するに至ります。

チュニジアの革命は、すぐさまエジプトに飛び火しました。そこには、過去30年近くにわたり、民主主義と自由と人権の発展を拒み続けてきたムバラク政権があったからです。1月後半には、カイロのタハリール広場にエジプトの民主化を求める数万人の若者たちが集まり、その数は日を追うごとに増え続けました。2月に入るとムバラク支持派と反対派との衝突も起きましたが、軍が反対派に加担するにいたって、2月11日、ムバラク大統領が退陣声明を出すに至ります。

このエジプトの動きは急転直下とも言えるものでした。その布石は何年も前からあったという人もいます。しかし、私が去年12月初めにエジプトを訪問した時、政府関係者や、学者、ジャーナリスト、学生などに会いましたが、誰もムバラク大統領が2ヶ月以内に退陣するなど言うことは夢想だにしていませんでした。事実、チュニジアでの革命が起きた直後に、ニューヨークでムバラク大統領一家に近い人物と話す機会があり、私から、「エジプトは大丈夫か」と聞きました。そうしたら、彼女は大きく笑って、「エジプトはチュニジアと違う。あのようなことは絶対起きない」と言って、まったく意に介しませんでした。しかし、それから1ヶ月と立つか立たないうちに、ムバラク大統領は退陣するに至るのです。

チュニジアとエジプトでの「アラブの春」といわれる革命は、概ねそれぞれの国民が自分の力で勝ち取ったものといえるでしょう。外国からの干渉をほとんど受けずに実現しました。他方、エジプトに続いて内乱が生じたリビアの場合は、リビア市民のカダフィ政権に対する反乱を、国連および国際社会が大きく援助しました。

よく覚えています。今年2月に散発的に自由を叫ぶデモが発生し、そのたびに彼らは当局から弾圧されました。しかし、抗議の群衆の数はリビアの地方都市で膨れ上がり、だんだんと首都トリポリにも近づいてきました。カダフィ政権側は大規模な武力の行使でこれを押さえにかかり、多数の死者を出すに至ります。トリポリ市内の反対派の人々の家に軍隊がドアを蹴破って押し入る場面がテレビでも映し出されました。デモ隊に発砲することを拒否した良心的な兵隊は、すぐに処刑されました。

自由を求める国民の声を無視し、これに銃弾で応える政権に、国際的な批判が高まりました。パン国連事務総長も幾度となく、リビア政府が一般大衆を武器で弾圧するのをやめ、彼らの声に耳を傾けるよう呼びかけました。さらに、国際メディアからは、国連は声明を出すだけでなく、国際社会の「保護する責任」に基づいて、リビアの人々の保護のため断固たる行動をとるべきとの声が高まりました。

この「保護する責任」という概念は、2005年の国連本部で開かれた世界サミットで合意を見たもので、それまでに種々議論のあった「人道的介入」とか「国際社会の介入の権利」などに代わる新しい考えです。これは、3つの要素からなります。第1は、国家は、人々を大量虐殺、戦争犯罪、民族浄化、および人道に対する犯罪から保護する責任があるということ。第2に、このため国際社会は国家を援助する責任があるということ。そして、第3に、もし国家が保護する責任を果たせない場合は、国連加盟国が国連憲章にもとづく武力行使を含めて迅速かつ果敢に対応する責任があるということです。

3月初め、テレビで、カダフィ大佐の後継とみなされていた息子のインタビューがありました。「反対派の連中はもうすぐ鎮圧できる」と自信に満ちた態度を示していたのが印象的でした。確かに、武器を取った反政権側の力は弱く、今にも散って砕けて消え入る情勢でした。この状況を一変させたのが、3月17日に採択された国連安保理決議1973号でした。

この決議は、リビア当局が人々を保護する責任がある事を想起しつつ、国連加盟国に、国連憲章第7章に基づいて、一般の人々の保護のためにあらゆる必要な措置をとること、すなわち武力行使を認めたものでした。これで、NATOがカダフィ政権側に武力攻撃を加える国際法上正当な根拠が与えられました。これは歴史的な安保理決議といえます。

これで情勢が逆転しました。その後の展開は、ご存知の通りです。反対派の勢力がカダフィ政権側を徐々に追い詰め、結局、10月21日にはカダフィの死亡が確認され、リビアの「解放」宣言が行われることとなります。

リビア以外にも、今年になって国連が国際平和と安全のために重要な役割を果たしたといえるものに、コートジボワールの大統領選挙の後の内紛の解決、それに南スーダンの独立に至るまでの貢献が上げられます。

今年起きたこれらの事件はいくつかの教訓を残しました。その一つは、「独裁者や暴君はベッドの上では死ねない」ということの確認です。

黒澤明監督の映画で「悪いやつほどよく眠る」というのがありますが、もはや、独裁者や暴君などの「悪いやつ」は、国民の反発を招き、場合によっては国際的な制裁を受けて、無残な死を迎える時代になりました。ルーマニアのチャウシェスクしかり、旧ザイールのモブツ、イラクのサダム・フセイン、セルビアのミロソビッチ、チュニジアのベン・アリ、エジプトのムバラク、そしてリビアのカダフィ。

こうすると、平家物語の祇園精舎の項を思い浮かべる人が多いと思います。「驕れる人も久しからず、ただ春の夜の夢の如し。猛き者もついには滅びぬ、ひとえに風の前の塵に同じ」。このあと、「遠く異朝をとぶらえば」、と続くのですが、「皆旧主先皇の政にも従わず、楽しみを極め、諫めをも思い入れず、天下の乱れん事を悟らずして、民間の憂ふる所を知らざりしかば、久しからずして亡じにし者どもなり」。これは、1000年以上も前のことなのですが、そっくり、ベン・アリ、ムバラク、カダフィなどに当てはまります。千年たっても、人間は変わっていないのですね。

こうして、驕れる人や独裁者を取り巻く国際環境はがらりと変わりました。国連では、「法を犯す者が無事で済む時代 - Day of impunity - は終わった」といっています。そしてこれを支えるのが、先ほど申しました「保護する責任」という新しい概念であり、また、制度的にこれを支えるのが、国連安保理と国際刑事裁判所です。内政不干渉を旗印に、国内で大量殺人を平気で行う政府が、外国からの干渉ないしは介入を排除できる時代は終わりました。国際社会の重要な一員として、日本もこの新しい状況に積極的に対応せねばなりません。

二つ目の教訓は、若者のパワーが爆発したら恐ろしいということです。アラブ世界では、2億5千万人の人口の60パーセントが25歳以下です。2010年時点で、その若者の23パーセントが失業者でした。彼らの不満がたまって、爆発寸前だったにもかかわらず、当局側が彼らの要求に耳を傾けて、正面から対応策をとろうとしなかったことが事態を悪化させたのです。アラブの春の主演は、まさにこのような若者でした。

しかし、これは必ずしもアラブ世界に限ったことではありません。どうやっても将来の展望が開けないとの不満を持った若者が変化を求める動きは、今世界中に広がっています。

皆さんは、今年夏から、スペイン各地やニューヨークのウォール街周辺、ロンドン、イスラエルなど、世界各地で続いている「反格差デモ」というのを聞きになったことがあると思います。

実は、このデモの源流をたどっていくと、去年10月にフランスで出版されたステファン・ヘゼルという人の「みんな怒れ」という小冊子にぶつかります。この人は今年94歳になる元外交官で、ナチス占領時代のフランスのレジスタンス参加者であり、国連の世界人権宣言の起草作業にも加わった人です。彼はこの小冊子の中で、貧富の格差の拡大、不法移民やホームレスの取り扱い、人権の無視、パレスチナ問題などを取り上げて、無関心は最悪の態度だ、レジスタンスの精神で「怒れ」と叫ぶのです。

この小冊子は、当初6000冊しか出版されなかったのが、話題を読んで、世界中で翻訳され、350万部以上も売れる大ベストセラーになりました。そして、今年夏にはスペインで腐敗などに反対するロス・インディグナドス（怒れ）運動に発展、そして9月に入って、ニューヨークのウォール街周辺での貧富の格差の是正を求める「ウォール街を占領せよ」運動へとつながるのです。彼らは、「自分たちは99パーセントだ」と叫んでいます。わずか1パーセントの金持ちが富を独占しているという主張です。

こうした動きは、何を意味するのでしょうか。インターネットを介して、何か過去には不可能だったような世界同時的な運動が、始まりつつあるのでしょうか。そして、税制改革のような政策的に重要な変化をもたらすのでしょうか。あるいは、1930年代のドイツで起きたような狂気の政治運動へと発展するのでしょうか。それとも、冬の訪れと共に雲散霧消してしまう一時的な現象に終わるのでしょうか。

いずれにせよ、この世界中の怒れる若者による運動は、アラブの春と並んで、2011年の激動する世界を象徴するものとして、歴史に記録されるでしょう。日本の若者も、自分たちが持つ潜在的なパワーの大きさに気づくべきです。

第三の教訓は、新しく登場してきたソーシャル・メディアの力はとてつもなく大きいということです。

「アラブの春」はソーシャル・メディア革命だったと言われます。インターネット上のブログ、ツイッター、フェイスブック、ユーチューブなどがその力を十分に発揮

して、数多くの人々の中の迅速な連絡を可能にしました。これは、独裁者や暴君にとっては、大変な脅威となりえます。昔のように、新聞社やラジオ・テレビ局を閉鎖してしまえば、ニュースが流れなくなるという時代ではなくなりました。携帯電話やアイパッドなどで写真やビデオを撮って、すぐさま国際的なメディアに送ることも当たり前になりました。

今フェイスブックを活発に使っている人が世界に8億人以上、ツイッターは1億人いるといわれます。フェイスブックの場合、75%以上が米国以外の人々で、70ヶ国語以上が使われています。

国連のウェブサイトをご覧いただくとわかりますが、国連もユーチューブ、フェイスブック、ツイッター、フリッカーなどのソーシャルメディアを大いに活用しています。国連ツイッターをフォローする人の数は50万人を超えました。私自身も、目下のところ104人のフェイスブックの友人がおり、このほかに331人からのリクエストをもらっているのですが、知らない人が多いので回答を迷っています。

今年9月に、ソーシャルメディアを使っての事務総長との会話をライブで実施したところ、合計1360万回の閲覧がありました。このうち、1350万回は、なんとウェブサイト Weibo を使った中国からのものでした。

フェイスブックが始まったのが2004年、ツイッターが2006年ですから、まだ10年も経っていないのに、この変わりようです。こういうのについていけないという年寄りの嘆きもよくわかります。しかし、世界は急速に変わりつつあるのです。1年経ったら世の中がひっくり返ってしまうようなことも起きています。過去の歴史を学ぶだけでは将来を見通せなくなっています。ぜひとも皆さんも情報入手のアンテナを高くして、柔軟な頭で、世界の動きをすばやくキャッチしてください。

今日お話ししたい二つ目の課題は、「国の勢い」というようなものを感じさせる最近の動きです。

元気一杯で、エネルギッシュな人というのは、見ただけで分かるし、態度や声が普通の人とは違うものです。こういうことが、国単位でも言えるのですね。国連で仕事をしていて、昇り盛りの勢いのある国とそうでない国との違いをつくづく感じます。国の勢いを感じさせるのは、インド、中国、韓国、ブラジル、カタールといった国々です。

たとえばインドですが、今安保理の非常任理事国です。今年9月の国連総会には、シン首相がやってきました。彼の演説は土曜日の朝だったのですが、週末なのに議場

は相当埋まっており、雑音も無く、人々が聞き耳を立てているのが良くわかりました。そして、演説が終るや否や、議場外にはシン首相にお世辞を言おうとする人々の長い行列ができました。そのなかに小生もいたのですが、国の勢いというのはこういうところにも表れるのかと感嘆しました。日本の首相の演説も一昔前はこうでした。

ニューヨークで各国が開くレセプションにしてからが、国の勢いを反映しています。その開く場所、料理の豪華さ、客の多さ、酒の量が違うのです。たとえば中国の国慶節のレセプションの賑わいぶりには他を圧倒するものがあります。

韓国の国の勢いも注目すべきものがあります。国連にパン事務総長がいて、当然勢いがついているという面もありますが、たとえば最近のG20や援助効果に関するハイレベル・フォーラム、来年の原子力セキュリティサミットや麗水（ヨス）でのエキスポ、2014年のITUの総会、2018年のピョンチャンでの冬季オリンピックなど、重要な国際行事が目白押しです。国連の広報局も今年夏2つの会議を韓国で開催し、パン事務総長も出席しました。

ブラジルも先進国入り間近といえるでしょう。私は、2001年から2003年まで、サンパウロでの日本総領事を務めました。日本の移民の子孫だけでもサンパウロ州に100万人以上おられます。当時はまだ、ブラジルの国の勢いを感じるまでには至らず、ブラジルは、「なかなか来ない未来の大国」と呼ばれたものです。それがこの10年近くの間に変りました。政治と経済の歯車がうまくかみ合うようになり、経済大国への道を歩んでいます。2012年のリオ+20国連会議、2014年のサッカーのワールドカップ、2016年のリオデジャネイロでのオリンピックと大きな行事が続きます。

アラブの小国、カタールも注目すべきです。今国連の総会議長はカタールの元国連大使が勤めていますが、この国は石油と天然ガスに恵まれて、世界一の一人当たり国民所得を誇る豊かな国です。この国の勢いは、次から次へと首都ドーハに招致する貿易や、開発、教育などに関する国際会議や行事に現れています。2022年のサッカーのワールド・カップもドーハで開催されます。ちょうど1週間前に、ドーハで開かれた国際会議に出席してきたのですが、その賑やかなこと、他に類を見ないものがあります。

こうした国と比べると、残念ながらわが日本は、最近、国の勢いというものをまったくと言って良いほど感じさせなくなりました。まだ世界第3位の経済大国なのにどうしてかと首を傾げたくくなります。バブルがはじけてから20年にもわたって日本経

済が停滞と低成長を繰り返す中で、何か「国の自信」みたいなものが消えていった気がします。人口が減りつつあることや、総理が毎年次々と変わって、日本人のリーダーの顔が見えないということも影響していると思います。

日本と国連の関係をとって、たとえば、国連分担金ですが、ピーク時の2000年には、日本の分担率は20.573%にまで達していました。しかし、その後の世界経済に占める日本経済の割合の低下に伴い、2009年は16.624%、2010年からは12.530%と、どんどん下がってきました。日本経済が世界経済に占める割合は2010年で8.7%まで下がりましたから、2012年の分担率の見直しの際にはさらに下がるでしょう。ここまで来ると負担が減り続けることを喜んでおられません。それは日本の影響力の低下につながるからです。

また、過去11数年間にわたって政府開発援助（ODA）が5割以上も削減されています。1997年度のODA予算は1兆2千億円でしたが、2011年度のODA予算は5、727億円です。日本のODA実績は2000年までは約10年間世界第1位を誇っていましたが、その後は、アメリカ、英国、フランス、ドイツに抜かれて、今や世界第5位の座まで落ちました。

国連の平和維持活動（PKO）については、最近、日本が南スーダンに自衛隊の施設部隊を来年はじめから派遣することを決定したことに、国連関係者も喜んでいますが。しかし、日本はこの分野でももっと活躍できる余地があると思います。2011年9月現在、日本からの兵士と警察の派遣数は258名で、人数としては、世界で49番目になります。

日本の最近の世論の動きも心配の種です。ニューヨークから日本のマスコミの動きを見ていますと、どうも日本はますます内向きで、世界の動きへの関心度が低くなっているのではないかと心配になります。もちろん今年は東日本大震災がありましたから、震災関連のニュースが中心なのは分かります。また、北挑戦の核問題や、中国、ロシアとの領土問題は、直接日本に利害関係が及びますから関心が高いのも分かります。しかし、アラブの春や、中東和平、イラク、アフガニスタン、ソマリアなどの飢餓、コンゴなどでの女性への暴力、といった世界の問題への関心は、他の欧米諸国に比べて決して高いとは思われません。

世界の動きに敏感な堺屋太一氏は、もう4年近くも前に、「日本は急速に衰えている」として、日本の国際的な地位が急に衰えだしている現状に警鐘を鳴らしました。私が会った日本の学者の中には、日本は新興衰退国だという人もいました。



それでも私は、日本にはまだまだ底力が残っていると信じています。日本の強みのひとつは、民主主義や基本的人権、表現の自由などの普遍的な価値への信頼が揺らいでいないことです。これは、戦後培ってきた民主的な教育の賜物といえます。これは大事にしなければいけません。教育の重視や老人への敬意など「アジアの価値」というものにも良い面はたくさんあると思います。しかし、独善に陥るのではなくて、普遍的な価値への信頼という共通の土俵の中でそういう良い面を取り上げてこそ、国際的に名誉ある地位を占めることが出来ると思います。日本はそういうことが出来る数少ない国のひとつです。

今年の国連開発計画による「人間開発指数」が11月はじめに発表されましたが、日本は187国中12位でした。これは、人々の生活の質や発展の度合いを、平均寿命、教育、所得などの指数を使って示す指標です。ノルウエーが1位でしたが、12位というのは決して悪い成績ではなくて、イギリスやフランス、イタリアなどの先進国、あるいは中国などの「BRICS」と呼ばれる新興途上国よりもはるかに良い結果でした。日本のいいところはちゃんと国連で評価されているのです。

それでは、そんなに悲観しなくても良いとしても、これから日本の国の勢いがさらに衰えるのをどうやって食い止められるのでしょうか？

まず第1に、持続的な経済成長を確保するためにも、日本の人口の減少に歯止めをかけることです。日本の人口は、1950年では8400万人で世界5位、2010年時点では1億2700万人で世界10位、2050年には1億人前後で世界16位ぐらいまで下がると予測されています。しかしこれはあくまで予測であって、色々手段を講じれば、この予測を覆すことも出来るはずですよ。

第2に、必要な労働力を確保するため、女性の社会進出がもっと必要です。高等教育を受けた日本女性の就業率は66%で、OECD30か国中29位です。日本の女性の国会議員の数は、衆参合わせて14%弱でしかない。女性社長率は全国平均で10%強。女性にもっと頑張ってもらえるような環境を整えないといけません。

第3に、念願の国連の安全保障理事会の常任理事国入りを果たすことです。そうすれば、日本は毎日世界の動きに否が応でも敏感にならざるを得ません。そして日本の安保理での対応が国際的にも注目されるでしょう。

今のところまだ、世界の大多数の国は、日本には国連の安全保障理事会の常任理事国となる資格があると信じています。満州事変の後日本は国際連盟を脱退しましたが、あの国際連盟で日本は設立当初から、英国、フランス、イタリアと共にずっと常任理事国だったのですよ。ぜひ一日も早く、常任理事国入りを実現してもらいたいと思

ます。そのためには、政府を後押しする国民レベルでの盛り上がりが不可欠です。ぜひ大きな声で、支援の輪を広げてください。

第4に、国の勢いを取り戻すためには、やはり世界の平和や開発のために必要な人材とお金を提供しなければなりません。国連平和維持活動を積極的に支援し、また、政府開発援助（ODA）の急激な減少に歯止めをかけねばなりません。

そして、日本にもっと国際的な行事や会議を招くことです。オリンピック、ワールドカップ、エキスポ、G20首脳会議、様々な国際会議など、日本の組織力を生かし、元気が出るものを開催することです。ここに来ます前に、金沢で生物多様性にかかわる国際会議に出てまいりました。金沢市は、昨年が続いて、今年も大きな国際会議を開催されました。このような東京以外でのところで、国際的な行事をもっと開いてもらいたいものです。韓国も、インチョン、プサンや、ヨスなどソウル以外のところで大きな行事をどんどん開催しています。

大学でも、たとえばアカデミック・インパクトの関連国際会議を是非検討していただきたいと思います。すでに、中国、ルーマニア、韓国、米国の大学がこのような国際会議を開催しています。

さらに、日本人が、もっと世界を舞台に、世界の人々を相手に活躍することです。これが、今日お話ししたい3つ目の課題です。

昨年ノーベル化学賞を受賞された根岸栄一教授は、新聞記者やテレビでのインタビューで、「日本の若者よ、海外に出よ」とおっしゃっていましたね。「日本は居心地がよいし、海外のほうが優秀とは限らない。しかし日本を外から見る機会がこれからますます重要になる」と。私もこの意見にまったく同感です。

最近日本の若者が海外に出たがらなくなったと言われます。海外留学生の数が年々減少しているといわれますが、特にアメリカへの日本人留学生の数が急速に減っています。日本は1995年ごろは4万人を大きく超えて、アジア最大の留学生数を誇っていましたが、近年、中国、インド、韓国などに次々と抜き去られました。

最近発表のあった、2010年から2011年の米国への留学生数は、中国が15万8千人でトップです。前年比23パーセントの伸びです。2位がインドで、10万4千人。3位が韓国の7万3千人。その後は、カナダ、台湾、サウディ・アラビアと続いて、日本は7位、前年度比14パーセント減で、2万1千人でした。日本は最近ずっと減少を続けています。これは、日本の居心地が良すぎて海外に出たがらない若者が増えているからでしょうか。

私たち団塊の世代といわれる世代は、1970年代に競って海外へと出かけました。狭い日本から飛び出て、世界に飛躍するのだという意気込みに燃えていました。多くの人が、そのうち日本は世界でナンバーワンの国になると信じて、日本の国際化、日本人の国際化を叫んでいました。「ジャパン・アズ・ナンバーワン」の夢はつい去りましたが、それでも若い人たちが世界の人々を相手に教育と経験をつんで、切磋琢磨し、それを将来の活動の糧としない限り、この国の勢いは戻ってこないでしょう。

海外で学んだり、仕事をして、何が役に立つかということ、それは、一にも二にも、自分に自信がつくことです。それから、外国人を外人と思わなくなることです。世界中の人たちが、自分の同僚や友人、あるいは自分と変わらない人たちだということが、肌で感じるようになります。

世界はぐっと狭くなりました。一昔と違って、今は日本からアメリカ、ヨーロッパへも、ジーパンに運動靴で簡単に、手軽に行けるようになりました。世界の大きな都市ではすし屋や日本食店は一杯ありますから、もう日本食にも苦労しません。

実力を試す分野、たとえばスポーツの世界や音楽、美術、映画、ファッション、アニメ、小説、料理などでも、どんどん世界が小さくなっています。だから、日本一になったところで大したことはない、皆、世界一を目指すようになりました。野球、サッカー、アイススケートだってそうでしょう。なでしこジャパンにしたって、世界一になったからあれだけ評価されたわけですね。

元気のある日本の若者を待っているところが世界中に一杯あります。大学や、研究機関、国際機関、特に国連がまさにそうです。NGOやボランティア組織もあります。日本人は、真面目で責任感が強く、しかもチームワークを大事にしますから、どこでも高い評価を得ています。

確かに海外に出るには、リスクやそれなりの苦労はあるでしょう。じっくり考えたら心配はつきません。失敗するかもしれません。強い意思がいります。英語を話せることも必要です。それでも、中学、高校、大学と英語を勉強しているわけですから、出来ないはずはない。事実、日本の高校生、大学生の英語レベルは格段に向上していると思います。発音は少々ブローケンでもいいのです。

今皆さんの中には、将来何が出来るだろうかと迷ったり、心配したりしている人がたくさんいるかと思っています。そういう人のために、いくつか参考になる話をお伝えしたいと思います。

アップル・コンピューター社の創始者で最近亡くなったスティーブ・ジョブズは、2005年スタンフォード大学卒業式で非常に感動的なスピーチをしました。インターネットで英文でも日本語訳でも手に入りますから是非読んでください。彼は、そのなかで、点をつなぐということを行っています。大学を中退するのですが、その後も大学で好きな授業を受けるのです。それはカリグラフィー、文字芸術の授業だったのです。当時は、そういう授業は彼の人生で実際に活用できる見込みは無かったのですが、10年後にマッキントッシュの設計のときに役立つのです。「先を見通して点をつなぐことは出来ない。振り返ってつなぐことしか出来ない。だから将来何らかの形でつながると信じなければならぬ。直感や、運命、人生、カルマ、何でもいい、何かを信じなくては行けない」と言っています。

主に戦前に活躍した日本の政治家で、「憲政の神様」と呼ばれた尾崎行雄が、76歳のときに、「人生の本舞台」という冊子の中で、こういう事を言っています。「昨日までの仕事は凡て今日以降の準備行為に過ぎない。人間たるものは、そう心得ねばならぬ...。人間はいくら年をとっても、昨日までの経験は、学校で言うならば予備門で、今日以降が本当の修行である。死ぬまでその気でやるべきものであると、始めて気がついた。そう気がついてみると、まるで天地が一変したような心持がした。」

チャーチルも1940年に首相になった夜、こう記しています。「午前3時ごろ就寝しようとしたとき、私は心から安堵を覚えた。ついに全局面を方向付ける指揮権を握ったのだ。まるで運命と共に歩いているかのように感じた。これまでの人生は、この時、この試練のための準備に過ぎなかったかのように思えた」。

いずれ皆さんも年を取ると気がつくと思います。今やっていること、悩んでいること、苦しんでいること、すべてが将来やることにつながっていくことを。スティーブ・ジョブズが言う様に、後になって振り返ってみると点と点がつながるのです。

私自身も、もっともっと小さな拙い経験ではありますが、同じ思いを何度もしてきました。外務省で勤務していた頃、自分が得意な分野で同僚の誰にも負けないと思っていても、望んだポストにはつげずに失望することが何度かありました。非常に落胆して、石川啄木の「友がみなわれよりえらく見ゆる日よ花を買い来て妻としたしむ」にえらく共感を覚えて、家内に赤いバラの花を買ったりしたこともありました。

国際機関での仕事を希望し、貿易を扱うガット（今の世界貿易機関）、ドクターばかりの世界保健機関（WHO）に4年ずつ出向した後、地球温暖化や環境問題の交渉担当になりました。貿易、保健、環境などと次から次へと異なる分野で仕事をして、自分はいったい何をしているのだろうと思う時期もありました。しかし、その後ニュ

ーヨークの国連代表部勤務になって、持続可能な開発に関する世界サミットの準備委員会の副議長になりました。そうしたら、驚きました、これまでのいろんな点、経験したことがいっぺんにくつつくのですね。持続可能な開発というのは、経済、社会、環境の統合的な仕事でしたから。

私の今の仕事もそうです。広報局というのは、国連の行うすべての仕事を広報するわけで、浅くとも広い分野を経験していたほうがいい。WHOでやったポリオ撲滅運動やパレスチナへの援助、地球温暖化防止の京都会議出席など、過去に経験したすべての点が今にいたってつながってきました。

ですから、若い皆さんは、これからいろんな経験をされるでしょうが、それがすべて将来の糧になると信じて頑張ってください。何をやっても将来必ず役に立つはずだと信じてやるしかありません。中国の李白の詩の一節に、「天わが材を生ず、必ず用あり」とありますが、この世に生まれてきた以上、誰もが必ず何か世のため、人のために役立てるはずですよ。「人間万事塞翁が馬」という中国の故事もありますね。どうか覚えておいて、将来困難な状況に陥ったときなど、「天わが材を生ず、必ず用あり」、「人間万事塞翁が馬」と、お経のように何度かつぶやいてみてください。きっと元気が湧くはずですよ。

今年の大震災は、大変な災害と苦難を多くの人々にもたらしましたが、世界からは、日本人のもつ自制心、忍耐、落ち着き、秩序正しい行動に、大きな賛辞が相次ぎました。世界の人々は、日本人の知性と感性と行動力を評価して、日本はかならず見事に復興すると皆信じています。

日本が、いろんな分野で活気があって、世界の国々から尊敬され、国の勢いを取り戻すようになるためには、皆さんのような若い人たちの世界を舞台にする活躍が不可欠です。内にこもることなく、自信を持って、世界を相手に、大きく羽ばたいてください。皆さんのこれからの活躍を期待して、私の拙い話を終えたいと思います。ご清聴ありがとうございました。（了）